

## 高経年団地のコミュニティ支援を目的とした実証実験の評価と考察

公的集合住宅団地の集約化手法に関する研究 その4

正会員 ○山田 信博\*  
同 藪谷 祐介\*\*  
同 林 匡宏 \*\*\*集約化 公的集合住宅団地 地域活動  
共用空間 コミュニティ支援 実証実験評価

## 1、研究の背景と目的

前稿では、高経年団地が抱える課題の整理、コミュニティ支援を目的とした筆者らによる実証実験「あけぼのテラス」の概要について報告した。コミュニティ支援活動は短期間では効果が得られにくく、中長期に渡る活動が求められる。また、団地居住者らによる自主活動及び担い手の育成にも時間を要する。そこで、今回行った実証実験に関する評価を参加者へのアンケート調査により実施した。この結果をもとに、今後の高経年団地における住民支援方策の検討及び集約化が計画されている団地のコミュニティのあり方について考察を行うことを目的とする。

## 2、アンケート調査結果

アンケート回答数は55であった。

## ・参加者の属性

参加者の約50%が70歳以上で、約56%が女性であった。現在の職業は会社員及び自営業は約18%で、多くは専業主婦・無職、パート・アルバイト等であった。

家族構成は単身者が約42%、夫婦世帯が約31%であった。本団地は2DK及び3DKの住居が多くを占めており、1～2人で居住する世帯が多くなっている。また、団地の居住年数は9年以下が約20%、10年から19年が約22%、40年以上生活している参加者が約18%であった(図1)。

今回実施した「あけぼのテラス」の参加者は、団地の居住年数は多様であるが、70歳以上で単身もしくは夫婦で生活する人が多い傾向となった。この傾向は筆者らが2017年に実施した団地住民への実態調査<sup>(1)(2)</sup>で得られた結果と同じ傾向が見られた。70歳以上でも、行事等への興味が有り、参加への意識が高い事も分かった。他にも、団地に居住していない参加者も約31%居た。それら参加者の多くは団地居住者の家族や知り合い等で、今回の情報は団地居住者から得たようであった。今回は団地内で実施する行事であったが、内容によっては周辺居住者も参加の意向があり、団地内外における接点の機会を得られる事が分かった。更に、団地居住者には、近隣に居住する家族もいるということも分かった。

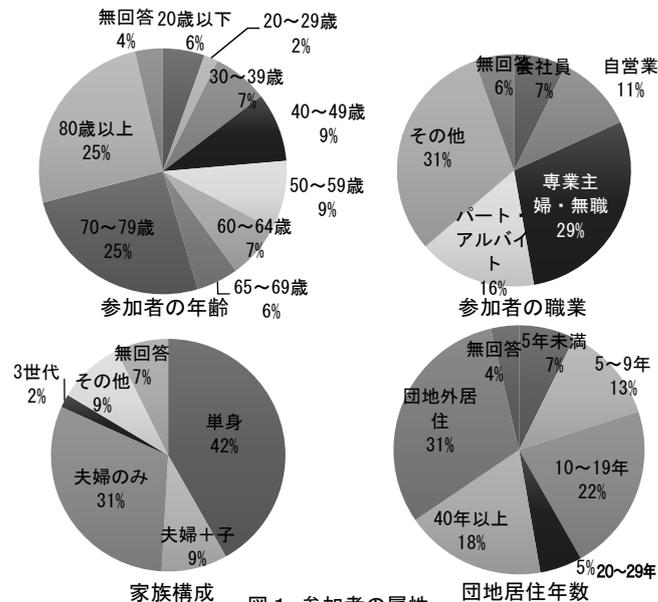


図1 参加者の属性

## ・参加の理由と人数、滞在状況

今回の行事に参加した理由は「面白そうだった」が約29%で、「大学の取り組みに関心があった」が約24%、「知人に誘われて」が約22%であった。老人会や季節の行事などが定期的に行なわれているが、内容や参加者も固定されており、今回のような大学主催の行事は特に興味を示したのではないかとと思われる。また、筆者らによる団地への関わりも2年目で居住者とのコミュニケーションも比較的円滑になってきた点も考慮すべきである。参加人数は1人が約36%、2人が約36%で、1人もしくは知人・友人などを誘って参加した人が多く、一人で参加できるイベントがあったと考えられる。

行事の滞在状況は、カフェやピザ、野菜の購入が多く、その場で参加者と会話して過ごしたという方が多かった。一方で以前実施した調査で希望の多かった「読書」は少ない傾向となったため、読書に適した場づくりも今後の課題である。滞在時間は30分未満や1～2時間、2時間以上と多様な参加状況が見られた、滞在したイベントによる違いと見られるが、もっと長く居たかったが帰ったという意見もあり、長時間滞在できるコンテンツも考慮すべきであると考えられる(図2)。

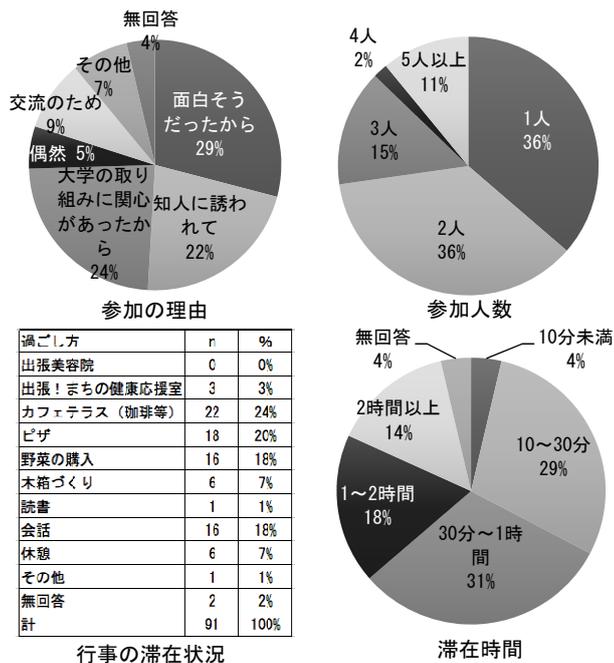


図2 参加の理由と人数、滞在状況

### ・行事の評価

今回の行事に関する評価は、「とても良かった」が約25%、「良かった」が約40%であった。とても良かった理由は「自治会以外の活動への関心」「住民のつながりの為の模索は良いこと」「会話がはずんだ」「いろいろな体験」などであった。良かった理由は「外での交流」「過ごしやすい雰囲気」「普段と違う体験」「イベントが楽しかった」であり、自治会が主催する行事とは違うイベントへの興味関心の高さ・評価を得られた。今まで参加していなかった内容や機会を創出することで、行事への参加意識の向上と住民同士のコミュニケーションの場を増やすことができると思われる(図3)。

### ・行事の開催頻度と常設として欲しいもの

今後このような行事を行う場合の開催頻度として希望する回数は、「半年に1回」が多く約35%であった。寒冷地のため、冬季は屋外のよる行事は開催が難しい。雪の無い季節に2度程度開催するのが望ましいと考えている参加者が多いと判断される。

他にも、今回のような日時が限定されたイベントではなく、常設的にあつたらいいと考えるものは「野菜の販売」が約27%と多く、次に「カフェ」が約25%であった(図4)。団地周辺には生活利便施設や商店等が少なく、喫茶店等も無いため、日頃購入する野菜や果物の購入や住宅以外で過ごす場所などの要望が高いことが分かった。また、単身もしくは夫婦世帯が多いため、会話の機会が少ないと考えられる。行事への参加によるコミュニケーションも重要だが、日用品の購入や喫茶など自身

の意思やタイミングによる会話や他者との交流も特に高齢者にとって重要な機会であり、日常必要とされるコミュニティであると考えられる。

### ・その他日常生活の不安と今後の意向

日常生活で感じる不安なことは「有事(地震)の際の対応」「買い物」「仕事」「健康」「単身生活」が多かった。現在のあけぼの団地居住者は不便を感じながら比較的離れた商店へ行き、不安な点もどうにか自身で解消しようと試みている。しかし、高齢化率の高い団地であり、現住民自身が行動できる時に団地の課題を共有し、住民による団地コミュニティ支援や維持のための担い手を生み出す必要があると強く感じた。

今後の意向に関する意見では、「イベントの継続を希望する」「会話や交流など住民との接点創出」「高齢だが時間はあるので地域活動に参加したい」など、住民との交流機会が増えるような行事を今後も継続して欲しいという意見があり、行事への参加や活動への関わりなどの意見も得られた。

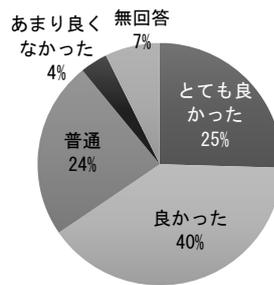


図3 行事の評価

利用したいもの	n	%
出張美容院	3	3%
まちの健康応援室	7	7%
カフェ	27	25%
ピザ釜	14	13%
木箱づくりワークショップ	6	6%
野菜の直売所	29	27%
図書室や休憩所	9	8%
特になし	5	5%
その他	4	4%
無回答	3	3%
計	107	100%

図4 常設的にあつたらいいもの

## 3. アンケート調査結果の考察と今後に向けて

今回の行事は主に筆者らによる試験的な実証実験行事で、多くの課題や団地住民の意識の向上も見られた。住民らによるコミュニティ支援の立案・運営はまだハードルが高く、専門知識を持つ者による初期段階の支援の必要性和担い手育成の重要性も同時に感じる機会であった。その点も今後の課題として捉え、高経年団地及び集約化が計画されている団地のコミュニティ支援のあり方について継続的に考察を行う必要性を強く感じた。

### 参考文献

- 1) 山田信博, 藪谷祐介: 高経年団地における居住者の実態把握, 公的集合住宅団地の集約化手法に関する研究その1, 日本建築学会学術講演梗概集, pp. 1379-1380, 2018.9
- 2) 藪谷祐介, 山田信博: 高経年団地における居住者の地域活動への参加特性, 公的集合住宅団地の集約化手法に関する研究その2, 日本建築学会学術講演梗概集, pp. 1381-1382, 2018.9

\* 札幌市立大学デザイン学部 准教授・博士(学術)  
 \*\* 富山大学芸術文化学部 講師・修士(デザイン学)  
 \*\*\* Commons fun 代表・博士(デザイン学)

\* Associate Prof., School of Design, Sapporo City Univ., Ph.D.  
 \*\*Senior Assist. Prof., Faculty of Art and Design, Univ. of Toyama, M. design  
 \*\*\*President, Commons fun, Ph.D. in Design